

『豊かなひとづくりへの秘策』
〜二宮金次郎の実践から〜

【後編】

親子をつなぐ学びのスペース

リレイト 代表

中桐万里子 先生



何とか元に戻してほしい、何ならどこかから物資を運んできてほしい”などと言います。

リーダーたちの意志が高まり、リーダーたちが自分の本心に立ち戻った時に、彼は復興を引き受けました。そして復興を始めようとなったら、今度は村人一人ひとりにも同じように「何に困っているのか、そしてあなたは何を望んでいるのか」と問いかけるのです。村人一人ひとりも農業者としての道を思い出す、そんなことが大変必要だと彼は考えていたんです。しかし、やはり武士たちと同じように村人は、「大雨のせいでこんなことになった、あの災害のせいで台無しになった、時代が悪い、社会が悪い、自然が悪い、だから私たちが何とか助けてほしい、

金次郎は、武士たちへと同じように「それは違うのではないか、農業者とはいったい何者だったのか、私たちの先輩は農業者として、何をしてきたのか、この国は、始まりは原野だったのだと、その原野を自分たちの先祖は懸命に切り開いてきた。この土地を懸命に実りの地へとしてきた、その力を持っていったのだ、そうやって人が食べることに困らない、その文化を生み出してきたのが、私たち農業者だったのではないかと。」
「先ずは私たちがその道を思い出すこと、自分の原点に立ち返ること、私たちの祖先が一体どんな思いで地域を開いてきたのか、そんなところに立ち返ることから始めようじゃないか」と。農業者の誇りを今一度思い出してほしいのだと言い、農業者一人ひとりの根っこをしっかりと深くつなげようとなりました。
このように一人ひとりが主役になり、土地を主役として生かして町を復活させていく、そのことを金次郎はとても大切に考えました。その土地とともに生きようとその土地を懸命に切り開き、そこで何が生み出せるかを考えてきた。それこそがいわゆる農業者、農耕民族の発想だった。いわゆる欧米の狩猟型の民族は餌の多い土地がいい、条件のいいところがいい、それを何とかして自分のものにしように考える。そのような狩

猟型の発想ではなく、暑い土地なら暑い土地として、寒い土地なら寒い土地として生かしていく、どんな土地でも、それと向き合いながらそこに実りを生み出す、そのように生産性を考えてきたのが農業者らしい考え方だということです。

さらに金次郎は「自分は世のため人のためということで邁進できるほど立派な存在ではない。私は元は農民だった。武士ではない、リーダーだつてできない、農村再建の指導なんてする資格もないし、その身分でもないのだ。ところがなぜ指導者といふことができたのか、それは小田原藩主大久保忠貞（おおくぼただざね）公が、武士でない一農業者であつた自分に農村再建の指導者という役割を託され、その思いに報いるにはどうすればいいかを懸命に考えた。仲間や弟子や家族や様々な人たちが自分を支えてくれてる、その思いを感じるからこそ何とかもう一歩先へとその思いが持てるのだ」と語っています。

金次郎が生まれ育った小田原の町（現・神奈川県の小田原市）には酒匂川（さかわがわ）という暴れ川があり、金次郎たちも度重なる氾濫によって大きな被害を受けました。江戸幕府によって派遣された多くの技術者が治水に苦勞し、その記録を読むのも大好きでした。「わが町のた

めに故郷を遠く離れて一生懸命になつてくださった方々があつた。私も、自分が生まれ育った場所ではない所でも力を尽くして恩返しをする。そんな意味もあつたのだ」と語っています。

私たちはどこからやってきたのだろうか、根つこのこと、あるいは道のこと、そんなことを考えようとの呼びかけのために金次郎が作つたのが「報徳訓」です。私たちが忘れがちな根っこ、私たちが忘れがちな道、そんなものを改めて思い出そうと、そのために作つたものでした。

報徳訓全文

父母の根元は天地の令命に在り
身体の根元は父母の生育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
我身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤勞に在り
身命の長養は衣食住の三つに在り
衣食住の三つは田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤功に在り
今年の衣食は今年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘るべからず